

目次

はじめに	7
1. 手話使用者のタイプ	7
2. 日本手話・手指日本語・混成手話	9
3. 日本の手話言語学研究的課題	11
4. この本の特徴と使い方	14
第1章 手話の音韻	17
1. はじめに	17
2. 二重分節性	17
3. 手話単語の音韻パラメータ	18
4. ストーキーの手話表記法とその問題点	21
5. 手話単語の「連続性」をとらえた表記(MH モデル)	23
6. 手話の音韻現象	25
6.1 同化	25
6.2 保持の消失と語中音添加	27
7. 両手を使う手話とバチソンの制約	30
8. おわりに	31
第2章 手話の形態	35
1. はじめに	35
2. 語基と接辞からできる語	35
3. 語と語の組み合わせでできる語(複合語)	37
4. 数字や指文字が含まれた手話単語	40
4.1 数字が入った手話単語	40
4.2 指文字が入った手話単語	40

5. 手話言語の動詞のタイプと一致現象.....	43
5.1 3種類の動詞.....	43
5.2 手話の「一致現象」を巡る議論.....	47
6. おわりに.....	49

第3章 手話の統語..... 53

1. はじめに.....	53
2. 「構造」の考え方と構造依存性.....	54
2.1 人間言語にみられる「構造」.....	54
2.2 文末コピー.....	56
3. 日本手話の否定表現.....	58
4. NM(非手指)表現といろいろな手話構文.....	63
4.1 2種類の疑問文.....	65
4.2 話題化文.....	69
4.3 接続表現.....	70
5. おわりに.....	71

第4章 意味に関わる手話言語の性質..... 75

1. はじめに：言語の「意味」の研究.....	75
2. 日本手話のテンスとアスペクト.....	76
3. 日本手話のモダリティ表現.....	81
3.1 認識様態のモダリティ.....	83
3.2 義務モダリティ.....	84
4. 語の意味的な性質とNM表現.....	86
5. 日本手話の情報の並べ方.....	90
6. おわりに.....	92

第5章 CL・RS・手話の創造性	95
1. はじめに.....	95
2. CL 表現.....	95
2.1 CL 動詞の特徴.....	96
2.2 CL 表現の分類.....	102
2.3 フローズン語彙と動詞以外に見られる CL.....	105
3. RS(ロールシフト・レファレンシャルシフト).....	107
3.1 2種類のRS.....	107
3.2 RSとCLの組み合わせ：複数の視点を同時に表現する.....	108
3.3 手話語り・手話ポエムと言語の創造性.....	110
4. おわりに.....	112
第6章 ろう児の手話の発達	115
1. はじめに.....	115
2. 手話の音韻の発達.....	116
2.1 手による喃語 <small>なんご</small>	116
2.2 手話の音韻発達のステップ.....	119
3. 手話の発達とジェスチャーとの比較.....	121
3.1 指さし(代名詞)の発達.....	121
3.2 手話の一致表現の発達.....	124
3.3 CL 表現の発達.....	126
3.4 NM 表現の発達.....	127
4. 手話の発達と年齢要因.....	129
5. 手話のクレオール化.....	131
5.1 ピジンとクレオール.....	131
5.2 家庭内での手話のクレオール化.....	132
5.3 コミュニティ内での手話のクレオール化： ニカラグア手話の誕生.....	133
6. おわりに.....	135

第7章 手話研究を行うために	137
1. はじめに.....	137
2. 手話言語学の研究対象：ネイティブサイナーの言語知識.....	137
3. 手話研究を行う際の注意点.....	138
3.1 研究トピックの設定.....	138
3.2 手話データの収集.....	140
3.3 研究成果の発表.....	146
3.4 研究成果がまとまったら.....	148
4. おわりに.....	149
おわりに	151
謝 辞	155
文献紹介.....	157
引用文献.....	159
索 引	169
[巻末資料]	
指文字表.....	172
ストーキーの手話表記システム.....	174

はじめに

この本は、初学者が手話言語学の基本知識を得るための入門書として作られました。読者として想定されているのは「言語学の基本知識を持たない」「手話言語学の基本を勉強したい」ろう者と聴者です。書記日本語を母語としないろう読者に配慮し、専門用語にはふりがなをつけています。また、ろう者が読みやすいよう、また内容を日本手話で表しやすいように、この本は短い文で平易な表現を用いて書かれています。言語学の知識がある読者のために、各章の最後に「もっと詳しく知りたい人のために」というセクションを設けました。

手指を使うコミュニケーションのすべてが「手話言語」ではありません。ここでは、この本が扱う「手話言語」が何を指しているのか、様々なタイプの手話使用者を比較しながら提示します。最後にこの本全体の構成と使い方と手話表現の表記法の情報を含めました。

1. 手話使用者のタイプ

手話の使用者は、成育歴や家庭環境により以下のように分類できます。この分類は海外でも手話言語学や手話の発達研究で前提とされているものです。

第1章

手話の音韻

1. はじめに

手話言語には「音」はありません。それなのに手話の「音韻」^{おんいん}を研究する分野があるとは、どういうことなのでしょう。この章の前半で説明する通り、「音韻」とは「音」とは違うものです。音韻とは、手話の単語を構成する小さな「部品」のようなものです。この章では音韻論の基本的な考え方、特に「弁別性」^{べんべつせい}について解説してから、手話音韻論の研究の発展を、順を追って見ていきます。

2. 二重分節性

人間言語の特徴となる性質はたくさんありますが、そのひとつが「二重分節性」^{にじゅうぶんせつせい}です。「小さなものが集まり、大きな固まりを作る性質」のことです。図1を見てみましょう。音声日本語の「傘(kasa)」と「肩(kata)」というふたつの語をよく見ると、それぞれが4つの音が集まって成り立っていることがわかります。

第2章

手話の形態

1. はじめに

「語」にはそれ以上分けることができないものの他に、^{けいたいそ}形態素という小さい部品が集まってできたものがあります。形態素というのは「意味をもつ最も小さい単位」で、形態素が組み合わされて語ができるときには、いろいろな規則性が見られます。複数の形態素が集まった語のタイプには、大きく分けて「^{ごき}語基と^{せつじ}接辞からできる語（^{はせい}派生・^{くっせつ}屈折）」と「^{ふくご}語と語からできる語（^{ごご}複合語）」があります。この章では、まず音声言語と手話言語の例を見ながら、これらの語のタイプについて解説します。そして、数の表現や指文字（の一部）が手話単語に組み込まれる例を紹介します。最後に、一部の手話動詞に見られる「^{いっちげんしょう}一致現象」を取り上げ、それを取り巻く議論について解説します。

2. 語基と接辞からできる語

「語基」に「接辞」をつけることで、新しい語が作り出されることはよくあります。これを派生といいます。日本語の「大きさ（大きい＋さ）」は派生語の例です。それとは異なるタイプとして、「食べた（食べ＋た）」「生徒

第3章

手話の統語

1. はじめに

第1章と第2章では、手話の「音韻」「形態(語のしくみ)」を考えました。音韻のユニットが集まって語ができ、語が集まって文ができます。以下の図にあるように、手話においても「音のレベル」「語のレベル」「文のレベル」の3つのレベルがあることが観察できます。このように、ある表現が異なるレベルで分析可能である性質を二重分節性にじゅうぶんせつせいといいます(第1章参照)。分節性は、人間言語の特徴のひとつです。

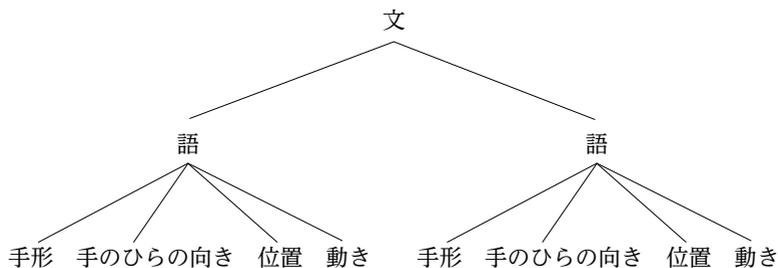


図1 手話言語の二重分節性

第4章

意味に関わる手話言語の性質

1. はじめに：言語の「意味」の研究

前の3つの章では、音韻・語・文という3つのレベルに分けて、手話言語の性質を考えてきました。その中でも、語と文にはそれぞれ「意味」に関わる性質があります。たとえば、次のふたつの例文を考えてみましょう。以下の例の「寝る1」と「寝る2」は形は違いますが、一見使い方は同じであるようにみえます。

- (1) a. /毎日 夜 子ども 寝る 1/ (毎晩子どもが寝る)
- b. /毎日 夜 子ども 寝る 2/ (毎晩子どもが寝る)

第5章

CL・RS・手話の創造性

1. はじめに

「CL表現」と「RS（ロールシフトまたはレファレンシャルシフト）」は、空間の中で身体を使う言語である手話言語独特の表現で、手話言語のデータを集めて分析する際には、十分注意を払う必要があります。まず2節では様々な種類のCL表現の文法的特性を解説します。3節では2種類のRSを紹介したうえで、それらがCLと組み合わせられて使われている例を示します。最後に、CLとRSの特性を用いた手話ポエムの例を取り上げて、手話言語の「創造性」について考えます。

2. CL表現

木村・市田(2014: 26)は、CLを「ものの動きや位置、形や大きさなどを、手の動きや位置、形に置き換え」るものと定義しています。手話言語のCL表現の分析は、名詞の意味的なカテゴリーや形などを示す形態素である類別詞(Classifier)の研究に強く影響を受けてきました。そのため、海外の手話言語学の文献ではCL表現を‘classifiers’と呼ぶものも多くみられます。しかし、手話言語のCL表現が音声言語の類別詞と同じといえるかどうか

第6章

ろう児の手話の発達

1. はじめに

手話言語の母語としての発達を、音声言語の場合と比較するためには、言語に関する養育環境の条件をそろえる必要があります。これまで行われた音声言語の発達の研究では、対象となる言語が使われる（モノリンガル）環境で養育者と子どもが出生時から同じ言語を使う事例を用いて、基本的なパターンが報告されています。その知識を踏まえたうえで、典型的なモノリンガル環境とは異なる環境で育つ子どもたちの言語発達が研究されます。したがって、ろう児と聴児の言語発達を考察するためには、デフファミリーに生まれて手話言語で育てられたろう児が手話言語を身につける発達プロセスをまず調べるのが重要です。

手話言語の発達研究における初期の考え方は「手話言語は目で見る言語であるため、絵のようにイメージがしやすいのではないか。だから、ろう児の手話の発達は聴児よりもスムーズに進み、また発達プロセスも大きく異なっているのではないか」というものでした。しかしその考えは正しくないことが様々な研究結果からわかっています。絵やジェスチャーのように見えるような手話表現でも、ろう児はそこにある「構造」を自然に見抜き、音声言

第7章

手話研究を行うために

1. はじめに

手話言語学の研究は日本では数が少なく、基本的な情報の共有が不足しています。この状況を改善するためには、たくさんの人が正しい言語学の知識を持ち、国内外の研究者が参考にできる研究をすることが重要です。この章では、手話の言語学に興味を持って、自分でもテーマを探して研究をやってみたいと考えるろう者と聴者のために、言語研究の基本的な考え方や注意すべき点について説明します。第2節ではネイティブサイナーからデータを聞き取ることの重要性について、第3節では手話研究に興味を持つろう者・聴者への情報提供を行います。

2. 手話言語学の研究対象：ネイティブサイナーの言語知識

言語学者が研究対象としているのは、母語話者（ネイティブサイナー・ネイティブスピーカー）の文法判断です。ネイティブサイナーとは、出生児から手話環境にあり、手話を母語として身につけたろう者を指します。日本手話という言語の研究をするなら、母語話者ではない人の言語データを混ぜて分析することはできません。たとえば、日本語の言語学的な性質を研究する